

## 台湾内政、日台関係をめぐる動向（2012年1月中旬-3月上旬）

### 陳冲内閣の成立、駐日代表の交代

石原忠浩（台湾・政治大学国際関係センター助理研究員）  
（元（財）交流協会台北事務所専門調査員）

春節明けの2月上旬、内閣改造が行われ、陳冲行政院副院長が新院長に就任した。また総統府秘書長には曾永權前立法院副院長、国民党秘書長には林中森前行政院秘書長が就任するなどの人事異動があった。立法院長選挙が行われ、現職の王金平院長が五選を果たし、副院長には台湾憲政史上初の女性副院長が誕生した。民進党は、蔡英文主席が選挙の敗戦にかかる検討報告を提出後、党主席を辞任、代理主席には陳菊高雄市長が就任した。

日台関係では、先に亜東関係協会の新会長に国民党秘書長を退任した廖了以氏が就任した。次に馮寄台台北駐日経済文化代表が退任し新代表には、外交部常務次長の沈斯淳氏の就任が発表された。2月上旬、台北で日系タレントらによる暴行事件が発生し、一時社会問題となった。

#### 1. 内閣改造人事：陳冲行政院長の就任



馬総統は再選後、すぐに内閣改造人事に着手した。馬総統自身の二期目の総統就任日は5月20日だが、現行政院長の呉敦義が副総統へ就任すること、2月末以降の欧州債務危機への対応の必要性から、早い段階から内閣改造に着手すると伝えられた。1月18日には、各紙で次期行政院長、副院長の候補が報じられた。<sup>1</sup>台湾は1月21日から29日まで春節休みとなったが、政治は休むことなく休暇中にも動きがあり、馬総統は継続性を重視し行政院長には現副院長の陳冲副院長が昇格し<sup>2</sup>、副院長には現内政部長の江宜樺氏の就任が確実視などと報じられた。<sup>3</sup>

1月31日呉内閣は総辞職し、馬総統は新院長に陳冲副院長を任命した。<sup>4</sup>馬総統は、「呉院長の就任時は、新型インフルエンザ流行の脅威、南部八八水害からの復興、世界金融危機という三つの大きな挑戦に挑むことになったが、その後の2年4ヶ月の施政は右問題の多くを克服した」として同人の業績を高く評価した。また次期院長に就任

する陳副院長に関しては「財政経済、法律の専門家であり民間での経験も要し、呉院長との協力関係も申し分なく重責に込められる」と指摘した。

新正副院長の経歴を簡単に紹介すると陳新院長は、政府系銀行からキャリアを始め、財政部金融局、政務次長、台湾証券取引所理事長を務めた後、2008年12月に金融管理委員会主任委員で初の内閣入り、10年5月の内閣改造で行政院副院長に昇格するなど、「政党政治」とは無縁なところで行政職のトップにまで登りつめた。新副院長の江氏はイェール大学で博士号を取得後、中央研究院で研究職、台湾大学で教鞭を採る学者であったが、学者での実績が認められ、行政院において政策面での統合協調を行い、研究発展、地方自治等の総合計画に責任を負う研究発展考核委員会（The Research, Development and Evaluation Commission）の主任委員に抜擢された後、2009年9月の呉内閣成立の際に内政部長に就任、さらに、その働きぶりが認められ今内閣改造で副院長に抜擢されることとなった。江新副院長は学者出身ということもあり、政治にかかわりを持たな

表1 新行政院長、副院長の経歴

	学 歴	経 歴
 陳 冲	台湾大学法学学士、修士	財政部金融局長、常務次長、政務次長 台湾証券取引所理事長 合作金庫銀行理事長 金融監督管理委员会主任委員 行政院副院長
 江宜樺	台湾大学政治学学士、修士 イェール大学政治学博士	中央研究院 台湾大学教授 研究發展考核委员会主任委員 内政部長

かったため政党入党歴がない経歴も注目を浴びたが、副院長就任の際に「政党政治の原則に基づき、入党を真剣に考慮する」と述べる場所があった。<sup>5</sup>また江氏の経歴が米名門校出身の学者であり、実務的な仕事ぶりが評価され、馬総統は江氏を次期台北市長に推すことを考慮していると指摘する者もあり、政治的な前途は有望であるとも報じられた。<sup>6</sup>

翌日の新聞各紙は、院長、副院長の人事は織り込み済みであったこと、総統の職権である外交、兩岸、国防人事は5月20日に異動することが予測されていたため、冷静に報じた中で、政務委員（無任所大臣）に民間から張善政氏、民進党を離党し総統選挙で国民党支持に廻った楊秋興前高雄県長の抜擢、作家で馬総統が台北市長時代に文化局長を務めた龍応台女史の文化建設委员会主任委員の人事が目をつけた。<sup>7</sup>一方、民進党中央は「宇昌案」で文書偽造などの手段を使って蔡主席を攻撃した劉憶如経済建設委员会主任委員の財政部長への抜擢、かつて台湾株式市場の動向に根拠の無い楽観論を述べたとして批判された尹啟銘氏を経済建設委员会主任委員に登用するなどの人事は「論功行賞」の人事であり、かかる人事では与野党が協力して経済振興に努力することは難しいと批判したほか、<sup>8</sup>民進党立法委員からは、今立法委

員選挙で落選した林益世前委員の行政院秘書長、35歳という若さで刺客として立法委員選挙に挑んだが惜敗した陳以真女史の青年輔導委员会主任委員の人事についても同様の批判が見られた。<sup>9</sup>

今内閣では47ポストのうち、16ポストで異動があり、全閣僚の中の32名が博士学位を有し、総統、副総統、行政院長、副院長をはじめ内閣メンバーの半数近くが台湾大学の卒業生で占められ、馬政権一期目の24名の博士学位取得者の記録を超える「博士内閣」となったと指摘された。<sup>10</sup>しかし、その裏には馬政権の最初の内閣であった劉兆玄内閣が「エリート内閣」と称されたものの、庶民の痛みを理解せず、冷たいという指摘がされ、最終的には八八水害への対応の不手際で辞任に追い込まれた過去があるところ、「博士内閣」にはかかる厳しい世論の目があることに留意し、各専門分野で着実に業績を上げることが求められる。

2月6日、総統府、行政院、国民党で正式な人事異動にかかる儀式が行われた。

午前、総統府で馬総統の主権による新任の総統府秘書長、行政院長等の宣誓式を行った後、<sup>11</sup>引き続き蕭萬長副総統が馬総統を代表して新旧行政院長の引継ぎの儀式を行い、退任する呉前院長には自身の経験も交え、ねぎらいの言葉をかけるとともに、陳新院長には、大きな期待をかける旨の

表2 総統府、行政院の主な人事異動

役職	新任者と前職	前任者
総統府秘書長	曾永權（立法院副院長）	伍錦霖
総統府第一副秘書長	劉寶貴（総統府第二副秘書長）	高朗
総統府第二副秘書長	羅智強（馬英九選対事務所幹部）	劉寶貴
行政院院長	陳冲（行政院副院長）	吳敦義
行政院副院長	江宜樺（内政部長）	陳冲
行政院秘書長	林益世（立法委員）	林中森
内政部長	李鴻源（公共工程委员会主任委員）	江宜樺
財政部長	劉憶如（経済建設委员会主任委員）	李述德
教育部長	蔣偉寧（中央大学学長）	吳清基
経済建設委员会主任委員	尹啟銘（政務委員）	劉憶如
青年輔導委员会主任委員	陳以真（アナウンサー）	李允傑
文化建設委员会主任委員	龍応台（作家）	曾志朗

資料元：行政院「行政院所屬政務人員、各部會與省政府政務首長人員簡歷冊」（2012年2月4日）<http://www.ey.gov.tw/public/Attachment/2261123271.pdf>

表明がされた。<sup>12</sup>同日午前には再び、蕭副総統の主権による総統府の新旧秘書長の交代儀式が行われ、蕭副総統は退任する伍錦霖氏の功績を称えらるとともに、新任の曾永権秘書長に対しては立法委員を20年近く務めた経験を総統府でも発揮することを期待する旨の発言があった。<sup>13</sup>ほかには、馬総統の信頼が厚いとされる羅智強氏が副秘書長に就任したのが注目された。

同日午後、馬総統は副総統を伴い総統府で新旧院長とともに記者会見を開催し、呉前院長の業績を称えらるとともに、欧州の債務危機と気候変動などの挑戦に対し、政府は一秒たりとも浪費する時間はなく、新内閣がしっかり仕事をする「安心内閣」として、国民を安心させることを期待すると述べた。<sup>14</sup>

同日、国民党秘書長の引継ぎにかかる儀式も行われた。<sup>15</sup>馬主席は退任する廖了以秘書長の党務と選挙事務にかかる功績を称えた。また新任の秘書長に就任する林中森氏に関しては、党歴45年、行政マンとして42年間奉職し、その間高雄市政府秘書長、行政院秘書長などの経歴から関係部局

との意見調整の経験が豊富であり、党の改革推進に有益であると期待を示した。その他の幹部人事では政策委員会執行長に林鴻池立法委員、組織発展委员会主任委員には立法委員選挙で刺客として困難な選挙区に挑み惜敗した蘇俊賓氏、党報道官には、馬選対事務所報道官を務めた殷瑋、馬瑋国両氏の就任が報じられた。<sup>16</sup>

国民党秘書長の人事が明らかになった時には、小さなサプライズを持って迎えられ、林秘書長は呉院長の下で信頼を得たこともあり、一部マスコミは同人を「呉派」人物と形容し、馬総統が呉次期副総統を自身の後継者に考慮してののではないかとの憶測が見られ、呉次期副総統は「同人事は馬主席の決定である」と説明するところがあった。<sup>17</sup>

総統選挙後の人事異動は慣例では、5月20日の総統就任式の際に行われてきたが、今時期の内閣改造は欧州債務危機への対応として、継続性を重視しながらも経済財政部門の閣僚を中心に調整することで、現政府の決意を伺い知るところとなった。



表3 国民党の主な人事異動

役職	新任者と前職	前任者
秘書長	林中森（行政院秘書長）	廖了以
政策委員会執行長	林鴻池（立法委員、党副秘書長）	林益世
組織発展委員会主任委員	蘇俊賓（党文化伝播委員会主任委員）	黄昭元

## 2. 選挙敗北後の民進党の動向

総統選挙、立法委員選挙で敗北を喫した民進党は、蔡英文主席が敗戦の夜に口頭で辞任を表明したものの、1月末の春節休み明け後の支持者への感謝の旅（「謝票」）と選挙敗北の総括をするため、正式な辞任の日時を2月28日とし、同時に代理主席を正式に選出し、5月に党主席選挙を選出することを決定した。<sup>18</sup> 1月28日、南部屏東県から始まった9日間にわたる支持者への感謝の旅では、各地で支持者に暖かく迎えられた。その際には、選挙敗北の原因として国民党、中国、台湾社会構造の三代要素の変化を検討する必要性を指摘した。<sup>19</sup>「謝票」の旅は、31日高雄市<sup>20</sup>、2月1日台北市<sup>21</sup>、2日桃園県<sup>22</sup>、3日金門県<sup>23</sup>、4日宜蘭県<sup>24</sup>、5日花蓮県、台東県<sup>25</sup>と離島を含む台湾を一周し支持者への感謝の表明と今選挙にかかる問題点を聴取したと説明した。

2月に入ると、党内関係者から選挙敗北の原因の検討だけではなく、民進党の対中国路線の修正、調整を主張する言論も見られるようになった。謝長廷元行政院長は、「党の两岸政策の論述を調整する必要があるのではないか、两岸政策の中身が国民党と近づけば、選挙では内政イシューで勝負できる」と訴え、<sup>26</sup>具体的には同人が過去に主張した「憲法各表」（注：中台がそれぞれ、中華人民共和国憲法と中華民国憲法により、两岸関係につき解釈をする。台湾の場合は中華民国憲法による一つの中国の解釈を行う。）の下で两岸関係の改善を模索すべきであると主張した。<sup>27</sup>しかし、党内には台湾独立や主権独立国家台湾を明確に主張

し続けるべきであるとする勢力も根強く、著名コメンテーターの金恒焯氏は『自由時報』紙のコラムで謝氏の主張を批判した。<sup>28</sup>その後、学者でもある郭正亮元立法委員は、两岸関係の現状に関し、「国民党と共産党は背広を着てパーティーに興じている。右に参加するには正装（92年コンセンサスの承認）が必要だが、民進党は何時まで正装しないでいられるのか」と比喻し、民進党が92年コンセンサスに代わる两岸政策の論述を創造できないことに憂慮する発言をしたが、非常に興味深い指摘だと感じさせられた。<sup>29</sup>

2月15日、党中央常務委員会が開催され、次週開催予定の中央執行委員会に提出する選挙の敗北にかかる報告がなされたが、出席者からは多くの批判が噴出したと報じられた。<sup>30</sup>呂秀蓮元総統は、同報告書の内容を「国民党のことを検討しているかと思った」と揶揄し、同報告の内容が本質に迫っていないと批判した。<sup>31</sup>その後、呂女史は21日に「萬言書」を党中央に提出した。右文書の中で同女史は選挙戦略において、「今選挙は蔡英文の個人ショーになってしまった」とする批判を含む8項目からなる問題点をまとめたと報じられた。<sup>32</sup>

中央常務委員会での議論を踏まえて、22日に開催された中央執行委員会では蔡主席ら党執行部は先の報告書の一部修正し、議論の末採択した「2012年選挙検討報告」は1月の選挙戦略を検討、分析し、将来の党務と政権復帰の際に参考にすると指摘した。<sup>33</sup>蔡主席は記者会見で、「選挙の結果が予期したものでなかったことは、党主席及び総統候補の当事者として、一切の責任を負う」と強調し

た一方で、「中国を相互連動関係の中で理解する必要がある」と対中国政策の転換の必要性を示唆する一方で、「中国の統一戦線工作に利用されないよう、中国と交流する際には明白な行動原則を確立する必要がある」との慎重な意見も提出した。<sup>34</sup>蔡主席の「更に中国を理解する必要がある」との発言は、会議出席者から拍手を持って迎えられ、一部の関係者は「蔡主席が退任前に民進党に残した最大の資産である」と評価する者もいた。<sup>35</sup>また、5月の主席選挙までの間の代理主席には陳菊高雄市長が推挙され、全会一致で可決され、28日にも正式就任すると説明された。

林右昌報道官は、「2012年選挙検討報告」につき三つの議題、「執政党としての信頼感の獲得」、「中国要素の影響と対応」、「地方経営と基本政治構造の突破」に対しては、進むべき対応の方向性の提案がなされたと説明された。表4は選挙検討報告の主な内容をまとめたものである。

右を筆者なりにまとめると、「中国ファクターの変質」、「無党派層に対する信頼感の欠如」、「基本政治構造の突破」となる。

「中国ファクターの変質」とは、過去の総統選挙においては1996年の李登輝、2004年の陳水扁が、台湾の主体性やアイデンティティーを強調し、有権者の共鳴を得たことで勝利したように、中国ファクターは「統一か独立か」、「中国か台湾か」といった政治問題の要素が色濃かったが、今選挙では中国国民党と中国共産党が「92年コンセンサスを承認しない民進党が政権を採ったら、兩岸の経済在交流は停滞し、台湾経済に甚大な被害をもたらすであろう」という「経済脅しカード」（経済恐嚇牌）が功を奏した感じがある。実際のところ、中国経済なしでは成り立たない台湾の企業関係者が、選挙戦終盤で92年コンセンサス支持という間接的な方法で馬総統の再選を支持し、かかる姿勢が有権者の投票行動に影響を与えたことは合理

表4 民進党の「2012年選挙検討報告」の概要

イシュー	検討点	提案
兩岸問題への対応	過去の兩岸ファクターが、総統選挙に与えた影響は「国家アイデンティティー」と「統一独立問題」というイシューであったが、最近の兩岸ファクターの選挙への影響は「経済イシュー化」の趨勢にある。	中国ファクターが作り出す「経済脅威感」に対し、民進党は策略上きめ細かく、国民に安心できる他の選択をできるようにすべきである。実務面では、更に具体的に中国との交流を展開し、反中国、鎖国といった一般的なイメージからの脱却が必要である。
中間層有権者	中間層（無党派層）が、選挙終盤で投票行動を（民進党から国民党に）変えたのは、都市部中産階級層の支持度が不足していたことであり、右が敗北の理由の一つであった。	立法院は野党にとって最大の政治舞台であり、党中央の政策部門との関係を強化し、政策イシューの主導と専門性を強化する。また首長ポストを獲得している地方都市で引き続き、党の基本価値と政策路線の優越な点を突出させ、民進党全体の執政に対する信頼感を向上させ、治国能力を備えた政党とのイメージを創出し、中間層の支持を獲得する。
政治構造問題	如何にして北部都市部での劣勢を逆転させることができるかは、将来政権を担う際の鍵となる。	積極的に既存の政治構造を突破するという意図を持ち、支持基盤の弱い地域に深く入り込み、基層レベルでは全国的に展開しなければならない。また地方レベルで公職を獲得し、「地方が中央を包囲する」策略を貫徹する。

資料元：「一分鐘看民進黨敗選檢討報告」『聯合報』（2012年2月23日）頁2。

的な推測が成り立つ。したがって、「経済脅しカード」を凌駕し、台湾住民及び企業関係者を安心させる具体的なカードを民進党が提出することができなかつたことが敗北の原因であった。

「無党派層に対する信頼感の欠如」は、中国ファクターとも関連があるが、現時点で民進党が政権を獲得した際の中国との交流をはじめ、台湾の有権者が民進党は台湾社会を任すことができる責任政党にはなっていないと判断されたことにある。

「基本政治構造の突破」は、総統、立法委員選挙ともに「南部ではかなり強いが、北部では圧倒的に弱い」という基本構造に変化が見られなかったことへの憂慮がある。敗戦検討報告では、地方の基層から支持を掘り起こし、勢力を拡大するという主張は、民進党政権時代であった当時と大差が無い主張である印象を受けた。今後は、如何にして地方、基層の育成を内実の伴ったものとして実施していくかが問われるであろう。

### 3. 蔡英文主席の辞任と陳菊代理主席の就任

2月29日、民進党は第14期第53回中央常務委員会を開催し、各縣市党部主任委員と中央常務委員が出席し、第13代代理主席への引継ぎが行われた。<sup>36</sup>蔡主席は党中央を離れる際に、「自身が主席を努めた4年間の感謝を述べるとともに選挙での敗北に関し自身の人生における大きな遺憾な出来事である」とお詫びした。また「民進党は陳菊代理主席の下に、次への発展のための基礎を築きあげるであろう」と期待感を示した。一方で、自身の動向については、「公益に従事したい」とだけ述べ明言は避けた。

代理主席に就任した陳菊女史は、就任式の際に、今後3ヶ月の任期期間中に、蔡主席の過去の努力に追随し、党を絶え間なく発展、進歩させるために党務改革小組を設置し、民進党の各組織、政策と路線につき議論し、5月に誕生する新主席が民進党を率いる際の重要な参考とさせたいと改革へ

の決意を述べた。<sup>37</sup>

次期党主席選挙に関しては、蘇煥智前台南県長が出馬の意向を表明しているが、<sup>38</sup>3月上旬の段階で「本命」とみなされる人物の立候補表明はない。そのような中で、陳菊代理主席は、蘇貞昌、游錫堃の両元行政院長を訪ね、意見交換をしたが、その際游元院長は次期主席選挙につき、協調による党主席の選出をはかり党内融和の優先を主張したと報じられた。同時に、本人はその可能性に否定的であるが、最終的には代理主席の陳菊女史こそ本命候補に浮上する可能性を指摘する者もいる。<sup>39</sup>その一方で、2008年、2012年の党内の総統公認争いに「連敗」した蘇元院長は、対外的には「考慮中」としながらも、近々主席選挙出馬宣言の準備をしていると指摘されるなど早くも水面下では、2016年の総統選挙を見据えた戦いが始まっている。<sup>40</sup>

次期主席は、民進党が真に政権交代時の受け皿となりうる、台湾住民に信頼感を与える政党になるためにも、大きな選挙のないこの2年間に党の兩岸政策、路線、党務改革などを実践する必要がある。特に兩岸政策は、台頭する中国という現実を踏まえた路線論争が必要でなかろうか。

### 4. 王金平氏が立法院長に再選、洪秀柱委員が憲政史上発の女性副院長に就任

立法委員選挙で勝利した国民党は、当初から立法院長のポストを1999年以来四期務めている王金平氏の推薦が支持されてきたこともあり、世論の関心は今回の立法委員選挙に出馬せず退任が決まっていた曾永権副院長の後任ポストにあった。民進党政権時代に、国民党は親民党との協力関係を重視した経緯から、第6期(2005年-2008年)の副院長ポストは親民党に譲ったこともあったが、右期間以外は一貫して国民党が正副院長のポストを独占している。

1月19日、国民党は立法院副院長の推薦人事



にかかる党籍立法委員の意見聴取を行い、その後党籍立法委員による投票の結果、二回目の投票で洪秀柱委員が副院長候補に選出された。<sup>41</sup>洪委員は、連続8回当選のベテラン委員であるとともに女性ながら歯に衣着せぬ言論で「小辣椒」の呼称で呼ばれる著名な委員である。民進党の男性立法委員は「刺々しく冷酷な」副院長は望まないと冗談めかしく述べたが、洪委員は「副院長になったら党派にかかわりなく、誰にも優しく接することになる。彼もきっと私の優しい一面を感じるであろう」と切り返すなどのユーモアセンスも持っており、メディア受けも良い人物である。

2月1日、立法院は第8期正副院長選挙を行い、国民党が推薦する王金平、洪秀柱ペアがそれぞれ68票、69票を獲得し、民進党推薦の許添財、葉宜津ペア（43票）を退けて当選した。（表5）親民党、無党団結聯盟は国民党候補に、台湾団結聯盟は民進党候補に投票した。王院長の得票数が洪副院長より1票少なかったのは、造反ではなく一部委員が誤って判子を押し無効票になったものであり造反ではないと説明された。<sup>42</sup>当選した王院長は、任期を満了した場合、院長の任期は17年となり、倪文亞氏の16年半の記録を超え立法院史上最長任期の国会議長となると報じられた。<sup>43</sup>5選に成功した王院長は、「立法委員の支持に感謝するとともに、委員の皆様と協力し、良い法案を制定し、厳しく予算を審査し、国家を更に進歩させたい」と抱負を語った。

## 5. 総統選挙再考：世論調査と実際の結果の比較

台湾の新聞、テレビによる選挙に関する世論調査は、固定電話を対象にした支持率調査が主体であり、必ずしも民意を反映したものではないとの指摘が従来からされており、筆者も一部同意するところがあるが、それでも右調査はその時の世論の雰囲気や相対程度を反映していることもあり、本連載でも政局や選挙の動向の参考のためたびたび引用、紹介をしてきた。

ここでは、1月14日に投開票が行われた総統選挙を例に、直前の調査結果と実際の開票結果を比較する。総統副総統選挙に係る法律である『総統副総統選挙罷免法』の第52条に政党及び個人は投票日の10日前からは選挙の世論調査の結果を公表してはならないという規定があることから、『中国時報』、『聯合報』など多くのメディアが1月3日の朝刊に選挙直前情勢として調査結果を公表した。『TVBS』は、投票10日前からは調査結果を公表できないことを承知の上で、1月3日以降も調査を実施し、これらの結果は14日16時の投票終了後に公表された。表6は実際の各陣営の得票率と、投票直前の『聯合報』、『TVBS』の調査結果との比較である。

『聯合報』は支持率調査のみ実施、『TVBS』は支持率と独自の係数をかけた得票率予測の双方を実施していたが、筆者の感想としては、両メディアとも「結構近い数字を出していた」である。投票2日前に行なわれた『TVBS』の各陣営の予測

表5 立法院正副院長の選挙結果

政党	正副院長候補と得票数
中国国民党	王金平 68
	洪秀柱 69
民主進歩党	許添財 43
	葉宜津 43

表6 総統副総統選挙の実際の得票率とメディアの世論調査の比較

	馬呉ペア	蔡蘇ペア	宋林ペア
実際の得票率	51.60%	45.63%	2.77%
聯合報支持率調査 (1228 - 0102)	44%	36%	7%
TVBS 支持率調査 (0111 - 12)	44%	34%	6%
TVBS 予測得票率 (0111 - 12)	49%	46%	5%

資料元：中央選挙委員会「總統副總統 候選人得票數」（2012年1月14日）

[http://vote2012.nat.gov.tw/zh\\_TW/P1/n0000000000000000.html](http://vote2012.nat.gov.tw/zh_TW/P1/n0000000000000000.html)、「聯合報選前最後民調 44:36 馬蔡差8百分點」『聯合報』（2012年1月3日）頁1、「2012 總統大選選前2天民調」『TVBS』[http://www1.tvbs.com.tw/FILE\\_DB/PCH/201201/lrpolm24yy.pdf](http://www1.tvbs.com.tw/FILE_DB/PCH/201201/lrpolm24yy.pdf)。

得票率は馬49%、蔡46%、宋5%であったが、実際の結果は蔡に関してはほぼ的中したが、馬の得票率は予測よりも2-3%増え、逆に宋の得票率は2-3%減った。しかし、この結果は、立法委員選挙の比例区で親民党が5.49%の得票率を獲得したことを鑑みれば、選挙最終段階で宋の支持者の一部が、当選の見込みの無い宋ではなく、次善の候補である馬に投票する「棄保効果が発酵した」と解釈することは可能である。

今回の選挙は激戦とされたが、筆者がしばしば参考にするメディアの世論調査は、一定の有用性を示したと感じさせられた。

## 6. 亜東関係協会会長の交代

対日事務を主管する亜東関係協会は2月10日、理監事会議と会員大会を開催し、彭榮次会長の退任に伴い、次期会長に国民党秘書長を退任した廖了以氏を選出した。<sup>44</sup>取材を受けた廖新会長は、「台日関係は一貫して友好関係であり、職務を全うし、台日関係を引き続き前進させたい」と抱負を語った。

廖新会長は、母親が日本人、日本語も流暢であり、対日事務にも通じていると紹介された。主な経歴としては、台中県長、内政部長、総統府秘書長、国民党秘書長等の要職を経験したほか、当時総統候補であった馬総統が2007年11月に訪日し

た際に同行している。

## 7. 駐日代表の交代と台湾各界の反応

2月28日、台湾外交部は馮寄台駐日代表から提出されていた辞職を認め、新任の代表に沈斯淳外交部常務次長を任命する人事を発表した。<sup>45</sup>楊進添外交部長は、同人事につき「沈次長は2010年5月に常務次長に就任して以来、亜東関係協会を含むアジア太平洋地域の業務を監督指導する責任を負っており、対日関係も非常に習熟しているだけでなく、文官最高レベルの官員であり、今人事は対日関係を重視している証である」として、「沈次長は日本語を話せない」、「日本とは特別な関係を持っていない」等の指摘を退けた。<sup>46</sup>一部メディアが、沈新代表は「日本語を全く解さない」と報じたことに対し、同人は「大学時代に履修していた。3年前に帰国して以来、時間を見つけて日本語学習に励んでおり、代表着任6ヵ月後には公の場所で日本語による講演をする」と自信を見せた。<sup>47</sup>

外交部が公表した沈新代表のプロフィールによると台湾大学政治学部を卒業後1979年に入部し、外交官キャリアは32年に及び、カナダ副代表、国際組織司長（局長に相当）、西アジア司長、チェコ代表、主任秘書、常務次長などを歴任しており、積極的に物事に取り組み、思慮深く、落ち着いた



性格で、完璧な経歴を有する外交官であると紹介している。

馮寄台駐日代表は自身の辞任について、「総統選挙後に馬総統に辞任の意向を伝え、その理由として母親をはじめ台湾で家族と一緒に過ごしたい旨説明し了承された」と説明した。また日台関係に関しては、「馬総統就任から3年を経て台日関係はすでに軌道に乗っており、関係は制度化されており、人と人の関係ではない」と強調するとともに、自身も日本へ赴任した際には人脈もなかったとして、沈代表についても対日事務経験の有無は大した問題にならないとの見方を示した。<sup>48</sup>

一方メディア及び政治関係者からは様々な意見表明がなされた。日本で博士学位を取得し、日本企業での勤務経験もある国民党籍の李鴻鈞立法委員は、「日台関係が最高の時にあり、さらなる対日関係の開拓を進めている重要な時機に駐日代表を交代させるのは少々理に合わないのではないか」と疑義を呈した。民進党籍の陳其邁立法委員は、「日本語はアジアで普遍的な言語であるのに馬政府は日本語に堪能な外交官を一人も見つけれないのはいったいどういうことか」と批判した。<sup>49</sup>中国時報の記者は、外交部の説明に対し、一定の理解を示しながらも、「日本との断交以来、台湾側は駐日代表に政界の大物を起用してきたとして、馬樹礼、蔣経国の息子の蔣孝武、李登輝元総統が信頼した許水徳、莊銘耀など相当な経歴を有していた」と指摘するとともに、「民進党政権でも党の重鎮ではないものの台湾独立運動のリーダーであった羅福全、許世諧といった知日派を置き対日重視姿勢を示してきたことと比較すると、沈新代表は役不足の感が否めない」と指摘した。<sup>50</sup>

筆者自身も台湾の知人、学生から、同人事につき感想を求められたが、「意外な人事という感はした。しかし、日本語を解すか解さないかは絶対条件ではない、重要なのは馬総統の信頼を得て、政府中枢と意思疎通ができることではないか」、

「日台関係は、特殊な個人的関係に頼るような時代ではないだろう」と述べている。馮代表も3年半前に、日台関係が比較的厳しい状態の中で赴任し、当初は日本のマスコミはじめ懐疑的な視線を投げかける向きがあったが、その後の日台関係は実務関係を中心に着実に進展したように、「日本語に堪能」、「知日派」は、駐日代表に絶対必要条件でなかったことを証明しており、東日本大震災後の日台関係の良い流れを友好関係に発展できるよう期待したい。

## 8. 日系タレントの暴行事件とその余波

2月2日深夜から3日にかけて、台北市内で日本人を含む4人によるタクシーの運転手に対する暴行事件が発生した。右事件がその後の10日間台湾の新聞、テレビを連日賑わすことになったのは、被疑者の中に Makiyo として台湾で活躍する日系タレント（父日本人、母台湾人）が含まれていたからであった。事件の発端は、Makiyo こと川島茉樹代と日本人の友人である友寄隆輝及び台湾女性タレント2名の計4名が、タクシー乗車時に、運転手の林余俊氏が後部座席の Makiyo らに2月1日から施行された後部座席のシートベルト着用義務を促したところ、口論になり、日本人男性及び Makiyo らが林氏に暴行を加え、意識不明の重態に陥った。（その後、林氏の様態は回復した。）

翌3日に友寄は警察に説明を行い、4日に Makiyo は自身の所属する芸能事務所関係者らと記者会見に臨んだが、記者会見時の Makiyo が濃い目の化粧と露出度の高い服装で「運転手が自分の胸を触った」、「態度がひどく、友人の友寄は私のために手を出した」と説明した。しかしながら、その数日後には他のタクシー運転手が暴行の様子を携帯電話で録画していた動画が明るみに出て、Makiyo 自身も暴行に加わり、4日の記者会見の内容のほとんどが自己弁護の嘘だったことが判明

した。その後、Makiyoは「酒に酔っていて覚えていない」などと責任逃れの発言を続けながらも被害者への謝罪をしたが、世論からは誠実さが無いと判断され総出でMakiyoバッシングを展開することになった。台湾で発行部数の一番多い大衆紙である『蘋果日報』は2月8日から11日までゴシップ記事も含めて連日一面トップで同事件を報じたほか、<sup>51</sup>普段は政治イシューに関する議論が行われる夜の討論番組のほとんどが同問題を取り上げ加害者らを凶弾し、一部の番組には、被疑者の友寄が出演し、謝罪などをする場面も見られた。

Makiyoに対しては、フェイスブック、ネット上で批判が展開され、同人が出演したCMの関連商品に対するボイコット、芸能界追放などと呼ば

かける主張もされるなど社会事件となった。その後、2月10日台北地検は、友寄に6年、Makiyoに4年を求刑した<sup>52</sup>。3月上旬の段階では、当初懸念された本事件に結びついた対日感情の悪化といった事態にはエスカレートはしておらず、日本への感情や日台関係に対する影響は限られたものであったのは不幸中の幸いであった。

今回の事件は、暴力事件という本質以外に日系女性タレントが暴行に加わったにもかかわらず、「酒」を理由に嘘をつき責任を回避する姿が台湾社会の怒りを引き起こしたものと見える。両者は現在も弁護士など関係者を通じて賠償金、和解も含めた方向で交渉していると報じられている。

<sup>1</sup> 「馬布局人事 内閣2月就改組」『聯合報』(2012年1月18日)頁4。

<sup>2</sup> 「陳冲接閣揆 財經部會先動」『聯合報』(2012年1月27日)頁1。

<sup>3</sup> 「江宜樺副閣揆 傳楊秋興掌內政」『聯合報』(2012年1月28日)頁1。

<sup>4</sup> 總統府ホームページ「總統肯定吳院長與內閣團隊之貢獻並提名陳冲接任閣揆」(2012年1月31日) <http://www.president.gov.tw/Default.aspx?tabid=131&itemid=26411&rmid=51>

<sup>5</sup> 「江宜樺：考慮加入國民黨」『中国時報』(2012年2月1日)頁2。

<sup>6</sup> 「觀察站／江宜樺 會是馬英九的複製人？」『聯合報』(2012年2月1日)頁4。

<sup>7</sup> 「新閣成軍 延攬 Google 總監張善政 文壇大將龍應台」『中国時報』(2012年2月1日)頁1、「陳冲新內閣底定 16人異動」『自由時報』(2012年2月1日)頁1。

<sup>8</sup> 民主進歩党「酬庸政治打手接任財經閣員，陳其邁：無助於朝野合作拼經濟」(2012年1月30日) [http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6022](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6022)

<sup>9</sup> 「綠委譏新內閣『落選者的疏洪道』」『自由時報』(2012年2月1日)頁4。

<sup>10</sup> 「新閣32博士、2院士 台大幫近半」『中国時報』(2012年2月1日)頁4。

<sup>11</sup> 總統府ホームページ「總統主持『新任總統府、行政院政務人員宣誓典禮』」(2012年2月6日) <http://www.president.gov.tw/Default.aspx?tabid=131&itemid=26437&rmid=514>

<sup>12</sup> 總統府ホームページ「副總統主持行政院卸、新任院長交接典禮」(2012年2月6日) <http://www.president.gov.tw/Default.aspx?tabid=131&itemid=26438&rmid=514>

<sup>13</sup> 總統府ホームページ「副總統主持新、卸任秘書長交接儀式」(2012年2月6日) <http://www.president.gov.tw/Default.aspx?tabid=131&itemid=26439&rmid=514>

<sup>14</sup> 總統府ホームページ「憑藉專業、能力與經驗，妥善面對歐債風暴可能帶來的經濟衰退。

」(2012年2月6日) <http://www.president.gov.tw/Default.aspx?tabid=131&itemid=26442&rmid=514>

<sup>15</sup> 中国国民党ホームページ「未來四年全力以赴 馬主席：國民黨還有連任壓力」(2012年2月6日) <http://www.kmt.org.tw/hc.aspx?id=32&aid=6817>

<sup>16</sup> 「新閣陳江配 三秘書長出爐」『自由時報』(2012年1月28日)頁3。

<sup>17</sup> 「林中森轉黨秘 吳敦義：馬決定的」『自由時報』(2012年1月31日)頁4、「林中森掌黨務 吳敦義：無關接班」『聯合報』(2012年1月31日)頁4。

<sup>18</sup> 「蔡英文3.1交棒 接班大戰啓動」『聯合報』(2012年1月17日)頁1。

<sup>19</sup> 民主進歩党ホームページ「謝票首日赴屏東、台南，蔡英文：民進黨會繼續打拚、不辜負支持者」(2012年1月28日) [http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6016](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6016)

- 20 民主進步黨ホームページ「肯定高雄立委表現，蔡英文：期盼立委主導議題，發揮政治能量」（2012年1月31日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6024](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6024)
- 21 民主進步黨ホームページ「蔡英文：讓新世代有挑起重擔及承擔更大責任的機會」（2012年2月1日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6026](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6026)
- 22 民主進步黨ホームページ「蔡英文：要負責任的人是我，期勉黨內冷靜、客觀面對問題」（2012年2月2日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6030](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6030)
- 23 民主進步黨ホームページ「結合立院黨團與議會力量 蔡英文：讓金門看到民進黨身影」（2012年2月3日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6031](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6031)
- 24 民主進步黨ホームページ「持續內部檢討，蔡英文：展現民進黨是有能力解決問題的政黨」（2012年2月4日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6032](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6032)
- 25 民主進步黨ホームページ「謝票行程劃下句點，蔡英文：深耕基層，隊伍不要散去」（2012年2月5日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6033](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6033)
- 26 「謝長廷：綠可調整兩岸政策」『聯合報』（2012年2月8日）頁8。
- 27 「向中間靠攏 謝長廷：總要有人當箭靶」『聯合報』（2012年2月9日）頁7。
- 28 「謝長廷們何不另立黨中央?!」『自由時報』（2012年2月12日）頁6。
- 29 「綠檢討敗選 郭正亮：國共談 92 共識 像穿西裝開趴」『聯合報』（2012年2月15日）頁4。
- 30 民主進步黨ホームページ「民進黨第十四屆第五十二次中常會新聞稿」（2012年2月15日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6038](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6038)、（2012年2月16日）聯1-2等。
- 31 「蔡敗選報告『真正問題敢點破嗎?』」『聯合報』（2012年2月17日）頁5。
- 32 「呂秀蓮萬言書 8 發重砲：選舉搞成蔡英文個人秀」『聯合報』（2012年2月22日）頁2。
- 33 民主進步黨ホームページ「民進黨第十四屆第二十次中執會新聞稿」（2012年2月22日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?sn=6043](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?sn=6043)
- 34 「蔡英文：須在互動中了解中國」『聯合報』（2012年2月22日）頁1。
- 35 「蔡『要更了解中國』 綠響起掌聲」『聯合報』（2012年2月22日）頁2。
- 36 民主進步黨ホームページ「民進黨第十四屆第五十三次中常會新聞稿」（2012年2月29日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?sn=6046](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?sn=6046)
- 37 民主進步黨ホームページ「接下黨主席印信，陳菊：民進黨的改革腳步不會停歇」（2012年2月29日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?sn=6047](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?sn=6047)
- 38 「蘇煥智打出『世代合作』」『聯合報』（2011年3月1日）頁2。
- 39 「呂菊爭黨魁？五月暗潮」『聯合報』（2011年3月1日）頁2。
- 40 「陳菊：歡迎黨公職人員與陸交流」『聯合報』（2012年3月2日）頁16。
- 41 中国国民党ホームページ「洪秀柱出線 可望成為首位女性立院副院長」（2012年1月19日）<http://www.kmt.org.tw/hc.aspx?id=32&aid=6805>  
<http://www.kmt.org.tw/hc.aspx?id=32&aid=6805>
- 42 「王金平 5 連霸 洪秀柱首位女副院長」『中国時報』（2012年2月2日）頁2。
- 43 「立院選龍頭 王洪配雙贏國會史紀錄」『自由時報』（2012年2月2日）頁2。
- 44 「廖了以 出任亞協會長」『自由時報』（2012年2月11日）頁6。
- 45 外交部ホームページ「我駐日本代表處馮代表已准退職，並由本部沈常務次長接任」（2012年2月28日）<http://www.mofa.gov.tw/official/Home/Detail/0add6a41-ce99-4b14-a428-a20cbdd56d43?arfid=7f013c3f-f130-44a9-905f-84cbaba2eca6&opno=907477b5-1d95-4205-a89d-320ed4806d4b>
- 46 「馮寄台請辭 沈斯淳駐日」『自由時報』（2012年2月29日）頁6。
- 47 「沈：我會說一些日語」『中国時報』（2012年2月29日）頁4。
- 48 「馮寄台：大選後向馬請退」『中国時報』（2012年2月29日）頁4。
- 49 「李鴻鈞：臨陣換將 不太合理」『中国時報』（2012年2月29日）頁4。
- 50 「分量縮水 駐日人事」『中国時報』（2012年2月29日）頁4。
- 51 「友寄隆輝 Makiyo 揍完運將 上酒店共宿」『蘋果日報』（2012年2月8日）、頁1「Makiyo2 度狠踹運將」『蘋果日報』（2012年2月9日）頁1、「Makiyo 逞凶現場錄音遭曝光女聲嗷喊『揍他!』」『蘋果日報』（2012年2月10日）頁1、「踹歐運將起訴求重刑 友寄 6 年 Makiyo 4 年」『蘋果日報』（2012年2月11日）頁1。
- 52 「檢方求刑 Makiyo 4 年 友寄 6 年」『聯合報』（2012年2月12日）頁1。